

新刊

□日本植物分類学会（監）戸部 博・田村 実（編著）：**新しい植物分類学 I, II.** A5. 講談社. 2012. I. 238 pp. ¥2,800+ 税. ISBN 978-4-06-153448-3 C3045 ; II. 319 pp. ¥3,600+ 税. ISBN 978-4-06-153449-0 C3045.

DNA 情報に基づく植物のタクソンの比較検討が広く行われるようになり、その結果を集約した APG III 分類体系の発表によって、植物界全体の系統関係が見渡せるようになった。従来、分類学的研究は、形態の比較研究が主流であり、ときどき成分や数値を用いた分類が提唱されるものの、長続きはしなかった。DNA 情報による系統解析は、少なくとも植物界全体をカバーするものであり、かつ分類学専攻者も取り込めるほどの技術となった。その結果、これ迄地味だった分類学界の研究者が活気を帯びてきたように思う。本書はこの機会を逃さず、I, II を含めて 29 名の著者が、それぞれの研究について自由に語っている。学術論文ではないからのがんばとした書き方で、楽しそうだ。話題は DNA に限らない。形態、発生、分布、花粉、染色体、生態など、たくさんのトピックにわたっている。I は被子植物、II ではこれに加えて裸子植物、シダ植物、コケ植物の話題も含む。私などは、これ迄「目」という分類群を気にしたことなかったが、現段階では「目」のまとまりとそれらを構成する「科」の配置に重点が置かれているようだ。いざれば属や種のまとまり方や配列にも及ぶことだろう。

本誌の読者には今さら「紹介」するまでもあるまい。それよりは地域の研究者や学生さんに読んでもらって「面白そうだな」と感じてもらい、かつ APG III が、単なる植物リストの配列順序の問題ではないことを、認識してもらうことが大事だろう。同好会誌などに、噛み碎いた解説があちこちで載せられるようになるとよいと思う。この点、日本植物分類学会が、植物界全体をカバーする組織であることは強みだと思った。売れ行き好調らしく、II を注文したら在庫僅少とのことで、二週間ほどかかった。

I の末尾には、被子植物の科が APG III の体系に沿って配列されたリストがあり、科の学名と和名が示されている。和名については日本植物分類学会植物データベース委員会を中心とした有志による作品で、学会の公式見解ではないと記されて

いる。また II の末尾には、裸子植物、シダ植物、コケ植物について同様なリストがあり、科の和名については編者らの独自の判断によると記されている。特に裸子植物については、まだ分子系統に基づく分類体系が確定していないため、分子のみならず形態情報なども考慮した体系として示したとある。科の和名は、次回の学術用語集編纂の際どうせ話題になるのだから、その時になってあわてないように、この機会に植物分類学会の態度を固めておくのがよからうと思う。というのは、前回あれだけ大議論の末に選んだ用語の多くが、研究の急激な進展の結果、次回には根本的見直しが必要となり、それに気を取られている間に、植物分類学会が付録に付ける恒例となっている、科の和名選定の時間がなくなってしまうおそれがあるからだ。そういうえば、本書の科の和名選定にあたって、文部省学術用語集植物学編（増訂版）（1990）の植物科名の標準和名は、考慮の対象にされたのだろうか？

（金井弘夫）

□小林元男：**愛知県樹木誌.** B5. 622 pp. 2012. ¥6,500. 私版. ISBN no number.

1952 年生まれの著者は、永年愛知県で林業関係の仕事にたずさわり、2012 年に退職した。この間県内を限なく調査した成果をとりまとめたものである。I 章は序文と凡例に当たる。主部は IV 章の 40 ~ 573 頁にわたる各論で、科の配列はエンゲラーにより、科ごとに種の検索表がついている。500 種類を超える植物が、原則 1 頁に一種類記述されていて、花、果実、樹皮のカラー写真および、花または果実をつけた枝の線画が示されている。写真も線画も見事な作品である。これに加えて、県内の分布図が皆ついている。その単位は、県植物調査会が行政区画を基にして幾分細かく設定したものに、著者独自に設定した島の区分を加えた 61 区画で、区画の平均的な広さはほぼ 2.5 万図に相当する。ここへ著者が確認した標本のみに基づいて、丹念にドットが打たれており、著者永年の調査の徹底ぶりに頭が下がる。これらのデータに基づいて、冒頭の II, III 章で、県内の植物分布、植生の概観が述べられているのだが、IV 章の所々に林業者ならではの知見が述べられているのが、本書の特色の一つである。たとえばコシアブラの項では、発芽後数年間は生長量が少ないが、それ以降急激に伸長することが約 20 年間のグラフで示されている。一方、コナラははじめか

ら順調に伸長していることが、他の図からわかる。私は長野県黒姫での野外実習で、コナラ林の林床では、毎年多量のコナラの実生が見られるのに、それが成長しない一方、伐採跡地では、はじめの数年はコシアブラが群を抜いて成長するのにコナラは目立たないが、10年ほどするとコシアブラの伸長が止まってしまって、コナラが取って代わるという光景を漠然と見ていたが、地域によってこういう遷移の様相が異なるらしいことに気付かされた。県内にクヌギの自生は極めて少なく、ほとんどはアベマキの誤認で、あとはシイタケ榎木用の植栽とのことである。ところどころに「愛知県花の名山・名所50」と題した簡単な案内が二・三件ずつ、カラー写真と共に挿入され、主な植物が解説されている。最後の索引では、植物名、科名、産地名、群落名、地名のすべてが、写真、線画、分布図の有無と共に読みによって検索できる。従来の植物誌とはちょっと変わった、ユニークな作品である。

私の立場からすると、これだけ詳細な分布図の元になった資料リストも、公開してもらえた大変有用なのにと思う。分布図だけでは他の用途に流用できず、産地の位置を特定できる資料情報が必要だからだ。とは言うものの、自分の経験に照らしても、それが無理なことは理解している。だが、県の事業として植物誌なり自然環境保護資料を作るとき、本誌の元資料はどうしても必要なはずだから、そういうチャンスを逃さず情報化を試みてほしい。入手についての連絡先は下記の通り。
442-0854 豊川市国府町岡本43-33. 小林元男. (郵便に限る)

近頃は、本書のような自費出版物が増えてきた。以前「出版大崩壊」の紹介で記したように、出版業が衰退しているのに加えて、IT技術の発達によって、素人が完成原稿を作れるようになり、それに付随する写真や図も自作でき、それらを組み合わせて、誰もがカラー印刷さえできるようになったのだから、当然の成り行きかも知れない。すでに「当社は出版は継続するが書籍小売りはやめました」と広告する出版社もある。これに伴って、情報の周知・交換に関わる新たな問題が浮上してきた。一つは命名規約との関係である。この種の「出版物」は正式の流通ルートに乗らない上、場合によっては「出版物」として認めにくい欠陥を持つものもあるため、植物命名規約上どのように位置付けるかは、いずれ話題に上がるだろう。誰

が見ても立派な「書籍」で、誰でも購入できるのだから、「贋写版はだめ」とか、「流通が限られているから」という性質のものではなさそうだ。もう一つの問題は、こういう「出版物」を認識するための書誌情報が不十分なものが少くないことだ。わが国の出版物には「奥付」というものが付いているのが特色だと言われる。そこには出版物の著者、発行社、印刷社、発行日付、版数、定価などがまとめて記され、現在では法的規制はないものの、重要な書誌情報として受け継がれている。最近では著者略歴、ISBN(国際標準図書番号)なども付け加えられ、内容の理解と情報整理に役立っている。授業中に図書を回覧するときには「まず奥付を見ろ」と言うことにしている。自費出版物は、奥付が不完全なものが少なくないし、自分の生年、学歴、職歴などを自ら公表するのは「見せびらかすのは嫌だ」とか「まことにお恥ずかしい」とか「謙遜」を理由に、省くのが美德という雰囲気があるが、それでは「敢えて世に問う」との理由と矛盾していないだろうか? そういうものは、読者が内容を理解評価する上有用な情報だと思うのだが……。そう言えば、自分の作品でも該当するものがある。背文字の表題や著者名は、書棚に文献を並べるとき(とくに本を取り出したり戻すとき)に大事な情報なので、少なくともこの二つは表示してもらいたいものだ。本書は大村敏朗氏よりいただいた。いつもながら同氏の援助活動に敬意を表する。

(金井弘夫)

□石沢 進・朱 雁(編)：新津丘陵とその周辺地域における絶滅危惧植物. A4. 積雪地域植物研究所(新津植物研究資料室). 2012. 66 pp. ISBN no number.

新津丘陵とは、新津駅の南、磐越西線と信越本線に挟まれた、新潟県旧新津市の一部を言う。著者らは1998年以来、この地域を対象に植物、特に2010以降は絶滅危惧種に注目した調査を継続してきた。73種類の絶滅危惧植物が、カラー写真、記相、確認/未確認年度などを伴って記録されている。最後にそのうち43種類について、新潟県全域での分布図が示され、新津丘陵での存否と県全体での分布の関係が述べられている。全域分布図は、石沢氏が中心になって作った新潟県植物分布図集1~20集である。県全域の分布図が作られたところは今では少くないが、本書のように時に応じて有効利用される例は少なく、石沢氏の

周到な準備がうかがわれる。

ただし、こういう「全県分布図」は、データの取得時点が様々な「累積分布図」なので、分布の時間的変遷を表現するには適当とは言えない。「〇〇年以前」とか「〇〇年～△△年」とか区切った分布図が作れるとよいのだが、それには元になった植物データが、整理されたリストになっている必要がある。それに加えて、多角的検索に耐えるデータベースとして構築されなければ、もっと作業がし易い。特に、植物名や年代や記録者名ばかりでなく、産地とその位置座標（経緯度、分の単位で十分。メッシュコードは位置記録としては応用性が低いので、勧めない）が必要である。しかし年代別分布図を作れば、それぞれの図に使えるレコード数は少なくなるだろうから、分布の変遷をたどれるほどのものになるかはわからない。石沢氏の悩みがそういう点にあることが察せられる。標本データばかりでなく、文献記録や観察会記事までも動員せねばならないだろう。名前や位置や日時の記録は、精密でなければ駄目という誤解があるが、そんなこと言っていたら、これまでの記録のほとんどは落第だろう。それでは記録した意義は失われる。ここらではじめて、「観察記事」というものの役割が見直されることになる。「標本に基づかないデータは、信用できない」と言っても、それしかないのなら、信頼度が低いことを認めながら使えばよかろう。そうでなければ、「観察会記録」はなぜ「記録」されるのだろうか？小泉秀雄氏の野帳記録が印刷刊行されているのも、彼が名の知れた人物で野帳をたくさん残しているという理由ばかりでなく、こういう点からも評価し直す必要がある。とくに、あって当たり前の植物は、観察記事でも「特記に値しない」から、記事にも標本にもならず、思わず空白が出現するのではないかと思う。旧い記録に「イヌノフグリ」とあっても、「もしかしたらオイヌノフグリかも？」というつもりで見ればよい。

もう一つ有用と思われる点は、生態調査や環境影響評価調査で作られた組成表であるが、無数といってよいほどあるのに、そういう利用の対象になっていない。ためにコピーしたことがあるが、組成表だけでは位置の特定が難しく、本文も参照せねばならなかったので、そのままになっている。組成表にせめて経緯度や地名が必ず入っていればよいのだが… 分類技能検定の受験者に、環境影響評価の報告書や証拠標本を、業務終了後はどう

扱うのかと尋ねると、企業秘密なので非公開。標本は一定期間を過ぎれば廃棄するとの答がほとんどだった。環境省はこういう情報の蓄積と再利用に関心を持ってもらいたい。

一方、いくらデータベースができていても、その都度分布図を手で描き直したり、白図に点を打ったりするのは手間がかかり過ぎる。近頃は地図ソフトが便利に使えるようになり、分布図を描くことは以前よりずっと楽になったので、それを利用することを考えたらよい。CD-ROM 長野県植物誌資料集は、清水建美氏のご希望で、年代検索という機能を持たせてこれを可能にしており、その利用例は清水建美：日本の帰化植物（平凡社 2003）の16-17頁に見られる。このCD-ROMは、長野県ばかりでなく、日本のどの地域でも簡単な分布図を描けるようにしてあり、内蔵データばかりでなく、外部のデータを読んで分布図を出力できるのだが、使用例はかなり示したつもりだが、そういう機能に気付く人はなく、清水氏も再起がむつかしいので、残念ながら利用されずに終わるそうである。

一般発表は目的としていないようだが、積雪地域植物研究所の連絡先は次の通り。956-0816 新潟市秋葉区新津東町2-5-6（新津地域学園内）。

（金井弘夫）